

優秀賞
(全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞)

水の「ありがた」味^み

今年の三月、以前アメリカからうちに来ていた留学生が能登半島地震のボランティアを紹介してくれた。すぐに軽い気持ちで参加することを決めた僕に、夏になるとたびたび水不足になるアリゾナ州出身の彼女が釘を刺す。

「追伸

あと、現地では水が出ませんから、たくさん水を持っていかないといいません。」

現地の断水については新聞やニュースで取り上げられていたため、ある程度は知っていた。しかし、自宅で蛇口をひねり、勢いよく水が流れ出すと、そんな意識は水と一緒に流れてしまった。

当日、集合場所の金沢市内にある産業展示館から、シャトルバスで三時間ほどかけて現地へ着いた。そこには思っていたよりはるかに過酷な現実があった。半壊もしくは全壊状態の家屋が並び、道路には



愛知県 愛知教育大学附属名古屋中学校

三年 荒木健吾

数々の亀裂が走っている。やはり水の事情も厳しい。給水車が忙しく出入りをし、公民館の外にあった蛇口を回してみても、キーキーときしんで悲鳴をあげているようだった。

そんな環境の中でボランティア活動は始まった。まず住民のトラックからガラス、ドア、テレビなど様々なゴミを下ろす。次に可燃と不燃、電化製品などに分別する。そして最後には、それらを収集車に積み上げる。こんなサイクルを約五時間繰り返し。軽い動機で参加した僕にとって、この「ゴミの片付け」は大変なものだった。春とはいえ初夏と変わらないような暑さの中で、ゴム手袋やマスクをつけているため、汗が体中から噴き出す。前日には、水を十分に補給せず、作業中に足がけいれんしてしまい、救急車で運ばれたボランティアがいたと聞く。

作業も終盤に差し掛かろうとするとき、留学生からの忠告が身にし

みた。

「水がない！」

二リットルあれば十分だと考えていたが、思いのほかの重労働で、飲んでもすぐに汗として流れ出てしまった。また、手洗い場には行列ができていたため、飲み水で手も洗ってしまった。ペットボトルからしたり落ちる雫を舐めているときだった。

「よかったですらどうぞ。」

同じボランテアに来ていた人が声をかけ、水を差し出してくれた。とにかくお礼を言って、ゴクリと飲んだ。夏の暑い日の運動後に飲むのと同じような、体中が潤っていくのを感じる「おいしい」味だった。さらに、この水はおいしいだけでなく、今まで初めて体験する、こんな環境の中だからこそその「ありがたい」味がした。

住民から運ばれたゴミの山の中には、珍しそうなウミガメのはく製や、木箱に入った高価そうな陶磁器がガレキと一緒に捨てられていた。逆に、僕たちの日常で無限に手に入り、タダ同然だと思っていた水道の水は、とても重宝されていた。今回の経験は厳しいものであったが、そのおかげで、水が宝物であることに気づくことができた。

再びメールが来た。彼女の故郷、アリゾナでは砂漠化が進んでいるらしい。驚いた。しかし、いきなり国境を越えた砂漠化と言われても一体僕に何ができるのだろうか。

「ジャー」

妹が水を流しっぱなしで手を洗っていた。

「止めなよ、早く。」

僕は急いで、そして少し強めの口調で叫んでいた。